

ギュスターヴ・クールベ 生涯と作品

年譜

稲賀繁美編

1819年

6月10日、スイスに接したフランス東部のフランシュ＝コンテ地方、ドゥー県はルー川に面した小都市オルナンに、ジャン＝デジレ＝ギュスターヴ・クールベ生まれる。父エレーノール＝レジス＝ジャン＝ジョゼフ＝スタニスラス・クールベは1798年生まれ、フラジェー、シレー、およびシャントラン村の地主で、オルナンにもぶどう畑と邸宅とを所有した。母シュザンヌ＝シルヴィー・ウードは、オルナンの地主の娘で1794年の生まれ。父は事業に大胆な才能と気まぐれな工夫とをみせ、失敗をも辞さぬ活動的な野心家であり、たいへんおしゃべり屋。母は対照的に慎しやかで優しく、人付き合いのいい現実感覚ある婦人で、夫の失策をとりつくりうのも専ら彼女であったという。彼女の父ジャン＝アントワーヌ・ウードはフランス大革命当時からの共和派で、その自信や粘り強さも含め、ギュスターヴにすくなからぬ影響を与えたという。

クールベには4人の妹がある。ベルナルディーヌ＝ジュリー＝クラリス(1821-1834)は早世したが、野心的なジャンヌ＝テレーズ＝ゾエ(1824-1905)、感傷的で敬虔なジャンヌ＝ゼリー＝メラード(1828-1875)、および生涯を独身で通し、オルナンの家族を守ったベルナルディーヌ＝ジュリエット(1831-1915)の三人は画家のモデルにもなっている。とりわけ、画家に信頼を寄せ続けた末娘ジュリエットは、画家の死後、その遺産管理に携わることとなる。

1831年 (12歳)

このころからオルナンのカトリック系中学校に通った後、親族のウード神父が指導する寄宿学校に通う。前者では一歳年長のマックス・ピュシヨン(1818-1869)を知るが、彼は、如才なく騒々しいギュスターヴの、学業には興味を示さぬ様子を伝えている。アントワーヌ・グロ男爵(1771-1835)の弟子であったというボー神父が、1833年から絵画の授業をもつようになり、後年ギュスターヴは、その恩義を忘れない。

1837年 (18歳)

息子が法曹界にすすむことを望んだ父の意思により、秋からブザンソンの王立高等学校に寄

宿する。田舎の自由な生活に親しんだギュスターヴには、都会の学校の規律は耐え難く、翌年早々から寄宿寮を出て、市内に下宿することとなる。ギリシア語、ラテン語および数学に辟易しつつも勉学を続ける。読み書きは覚えたが、そうしたものを軽蔑して、綴り方には頓着せず、自分勝手のめちゃくちゃで、正書法などなきに等しい有り様であった。勉学に並行して、ダヴィッドの弟子を自称する画家フラジュロ(1774-1840)のアトリエに通う。モデルを使った習作のほか、風景画に興味を示す。

1839年 (20歳)

マックス・ピュシヨンの詩文集に4葉の石版画による挿絵を寄せたものがブザンソンで出版される。この年の末バリーに上り、新古典派系の歴史画家シャルル・ストゥーベン(1788-1856)のアトリエで絵の修行を始める。

1840-43年 (21-24歳)

父の希望で、ジャン＝アントワーヌ・ウードの甥、パリの法律学校教授ジュリアン＝フランソワ・ウードに就くことになる。彼の世話にはなるが、法律を積極的に学んだ様子はなく、絵の勉強に専念する。ストゥーベンのアトリエに入ったのもウードの助言によったものかと推測されるが、ギュスターヴはむしろ自己流を好み、もっぱら、先生なしに自由に稽古のできるアカデミー・シユイスに通った。そこで後に静物画家、風俗画家として名をなすフランソワ・ボンヴァン(1817-1887)に会い、二人の共通の友フランソワ・ヴェーによれば、ボンヴァンに連れられてルーヴル通いをするようになったという。ドラクロワ、ジェリコーのみならず、ジエグレル、シュネッツの他、このころイタリアから帰国したアングル作品などを模写したことが知られる。また、同郷の友アドルフ・マルレが、師匠のオーギュスト・エッス(1795-1869)のところに連れて行ってくれ、エッスが自分の作品に多大の興味を示したと、ギュスターヴは父親宛の手紙で報告する。アンリ・ミュルジェール(1822-1861)の小説『放浪芸術家生活の場景』(歌劇『ラ・ボエーム』の原作)に出てくる音楽家ショナールことアレクサンドル・シャンヌとも交友を結ぶ。親元からの仕送りを頼みとする、切りつめた生活が続く。1841年から43年まで、毎年サロンに友の肖像や自画像、狩猟図、室内画などを出品するが、すべて落選する。この出品記録から、1841年にはサン＝ジェルマン＝デ＝プレ、42年にはピュシ街、43年にはラ・アルプ街に住所の在ったことが知られる。それ以前も、サン＝ジェルマン大通りとサン＝ミッシェル大通りととの交差する繁華街の周辺に、居を転々と変えていた。

オルナンに帰郷する折の他は、もっぱらパリでの制作に没頭するが、1841年には幼少以来の友、ユルバン・キュエノーとル・アーヴルに旅し、生まれて初めて海を見、深い感銘を受ける。

1844年 (25歳)

息子が怠慢なのではないかと怪しむ国元の父の説得に努めるうちに、3月、エッスの忠告を入れて出品した自画像《黒い犬を連れたクールベ》(本展no.4)がサロンに初入選し、良い場所をあてがわれる。経済状態は好転せず、ひき続き家族の援助を要請する。帰郷した際に妹ジュリエットの肖像(パリ、プチ・パレ美術館)を制作。

1845年 (26歳)

サロンに5点の作品を送るが、《ギタレロ》のみ入選。二人の買い手が現れるが、エッスの提案した500フランは高すぎて、売れるには至らない。家への便りに、エッスから将来を有望視されているが、成功するためには5年以内に大作をものして名声を得るのが必須であり、そのための資金が不足している、うんぬんとある。だが夏じゅうパリにとどまっても大作の構想がまとまらぬまま、夏の終わりにオルナンに戻り、肖像、風景さらに宗教画を制作する。またこの年、阿姆斯特ダムの画商ファン・ヴィッセルリングと知り合う。

アルジェリア占領に取材した、縦5メートル、横28メートルに達する画面を持つ、オラース・ヴェルネ(1789-1863)の超大作《アブデル・カーデイルのスマラの奪取》が話題を呼ぶ。

1846年 (27歳)

45年末または46年新年早々パリに戻ったギュスターヴは、早速、精力的に仕事にとりかかった旨、里に書き送る。しかしサロンに出品した8点のうち、入選したのは1点のみ、展示場所も悪く「風向きは逆風」と里に報告する。自画像《革のベルトをつけた男》(オルセー美術館)が入選作かと想定されるが、疑問が残る。後年の友カスタニヤリの説をとれば、この年オランダ旅行に出る。画家を招待したファン・ヴィッセルリングの肖像を制作したことも、阿姆斯特ダムの展覧会に参加したことも、両親への手紙には見えない。

クールベ《革のベルトをつけた男》、1845年頃、パリ、オルセー美術館



1847年 (28歳)

サロンには3点を送るにとどめたが、いずれも落選する。本年の話題をさらったのはトマ・クチュール(1815-1879)が出品した大作《顔廃期のローマ人》(オルセー美術館)であった。おそらくこの年、小説家、批評家のジャンフルーリとともにベルギーに旅行する。8月母の両親が相次いで亡くなる。9月17日愛人のヴィルジニー・ビネに息子が生まれる。デジレ=アルフレッド=エミール・ビネと名付ける。彼らのもとに駆け付けることもなく、9月にオルナンに戻った画家は、年末にパリに出る。

サロンの審査基準のあまりに狭量なことに抗議して、公認の年次独立展覧会を組織する決議が、彫刻家バリーの家でまとめられる。署名者にはドラクロワ、ドーミエ、ドカン、テオドール・ルソー、アリ・シェフェールなどの名も見える。

1848年 (29歳)

冬をサロンの準備に費やした画家は、1月両親にあてて希望にあふれた手紙を綴る。いわく、自分を熱狂的に支持してくれ、新聞や芸術の方面で多大な影響力ある人たちに囲まれており、新しい流派の旗揚げも間近だ、うんぬんとある。「大きな影響力ある人たち」の実態とはいえば、同世代の駆け出し文士ボードレール(1821-1867)とジャンフルーリ(1821-1889)であって、クールベも挿図原画を寄せて支援した、かれらの革命的な小新聞『サリュ・ピュブリック』には、わずか2号で廃刊という運命が待っていた。二月革命勃発にもかかわらず、サロンは3月に開催され、審査委員会による鑑査の制度が廃止されたため、クールベも出品作10点すべてを展覧することが出来た。《チェロを弾く男》が一部の批評家の目にとまる。サロン展覧作品総数は5500点に達し、自分の作品も目立たなかったクールベは、家への便りに、政治には関心がなく、また共和制は芸術家に最適の政体ではないとも書いている。父を安心させるための演技半分としても、半分は本音で、革命の混乱下、画家はひた

クールベ《チェロを弾く男》、1847年、ストックホルム、国立美術館



すら制作に熱中した。この年の末には、クールベが入りびたりだった芸術家の溜まり場ビヤホール「アンドレール」は「写実主義の神殿」と化する。この酒場に隣あったオートフイユ街に居を定めたのもこの頃で、1871年まで住むこととなる。おそらくこの頃、ボードレールの肖像(モンペリエ、ファール美術館)を描く。

1849年 (30歳)

サロンは、出品者たちの選出した審査委員会によって鑑査を行うこととなり、6月15日ようやく開催された。ボードレールが説明書きをつけた11点の出品のうち7点が入選。なかでも大作《オルナンの食休み》(リアル美術館)に接したドラクロワは、そこに「誰にも依存せず」「前触れもなく出現した革命家」を、またアングルは、過度の資質ゆえに芸術そのものからみ出してしまった「危険な手本となる新しい革命家」を見出した。この作品は2等賞に輝き、国家買い上げとなってリアル美術館に入り、クールベは以後無鑑査の特権を享受することになる。秋オルナンで盛大に迎えられた画家は、父が物置を改造して作ってくれたアトリエで《石割り人夫》を制作し、つづいて《オルナンにおけるある埋葬の歴史画》に着手する。

1850年 (31歳)

故郷で狩猟や謝肉祭を楽しみ、俗謡採集や古陶器愛好に時をすごすかわり、里の住人たちをモデルに《オルナンにおけるある埋葬の歴史画》の制作を進めるが、縦3.5メートル、横8.7メートルの大作の全体を、うしろに下がって見るだけの距離のゆとりがアトリエにはなく、「盲滅法の制作」であった。サロン開催の遅延を利用して、まずオルナン、ついで5月にはブザンソン、6月にはディジョンで展覧会を開く。夏にパリに戻り、ジャン・ジュールネとベルリオーズ(1803-1869)(本展no.8)の肖像を制作。サロンは公式には12月30日に開催、実際に公開されるのは翌年の1月3日にずれこんだ。

この年アングル(1780-1867)が美術学校校長に就任した。

1851年 (32歳)

このサロンにクールベは先の2点の肖像のほか、《オルナンにおけるある埋葬の歴史画》、《市から帰るフラジューの農民たち》、《石割り人夫》など9点を出品する。このサロンにはミレー(1814-1875)が《種蒔く人》、《葉を束ねる人々》を、ドーミエ(1808-1879)が《ドン・キホーテとサンチョ・パンサ》、《サテュロスに追われるニンフたち》、《シレーノス》を出品していた。またドラクロワ(1798-1863)はこの年、ルーヴル宮アポロンの間の天井画を完成した。

《埋葬》に批評界は騒然となった。キュエノーがジュリエット・クールベに書き送ったところによれば、指物師が石工が突然画家になって苦も



クールベ《市から帰るフラジェーの農民たち》, 1850-55年, プザンソン美術館



クールベ《村のお嬢さんたち》, 1851年, ニューヨーク, メトロポリタン美術館

なく天才を発揮したのだとか、おそるべき社会主義者で陰謀団の一員であるとか、矛盾したうわさが飛び交い、美術界の会話はクールベで持ち切りだという。テオフィル・ゴーチエ(1811-1872)は、批判に耐えるだけの力量をクールベに認め、褒賞が授与されないのをいぶかしがった。歌謡の作詞作曲で人気を博しつつあった詩人ピエール・デュボン(1821-1870)とともに、弁護士クレマン・ローリエの招きで、その故郷ペリー地方に滞在し、疲れを癒したクールベは、ついでブリュッセルとミュンヘンに「招待」されて、展覧会に参加した。ガルサンなる人物から、11月10日パリで非合法政治集會に参加した嫌疑で訴えられたクールベは、アリバイを申し立てるついでに、「社会主義者のみならず、民主主義者、共和派、要するにあらゆる革命の支持者、そしてなによりレアリスト」という信条告白を行い、レアリストとは「まことの真実の誠実なる友」であると定義する。この手紙から、3人の妹たちをモデルにした《村のお嬢さんたち》(本展no.63参照)を制作中であることが知られる。

また、共和国大統領ルイ・ナポレオン・ボナパルトは、サロン出品作の《画家の自画像》を所望し、クールベは前年から制作に取りかかっていた《火事に駆けつける消防夫たちの出発》をもって、大統領からの国家注文にも答えようとしたとおぼしい。しかし、12月2日のナポレオンによるクーデタによって、この絵は、もはや、帝政をめざすナポレオンへの皮肉な中傷以外のなにものでもなくなり、制作は中断される。モデルに頼んだ消防夫の隊長が流刑に処せられるにおよんで、作

品は中途放棄のやむなきに至り、画家の手で嚴重に梱包されたという。同郷の社会主義者ブレードン(1809-1865)に構想を負ったとの噂が加わったのも、お蔵入りの一因である、とする説もある。

1852年(33歳)

愛人ヴィルジニー・ビネが息子とともに突如ダイエップに発ち、クールベとの決裂は明白になる。画家が憲兵隊から監視される状況があったものかとも推定されるが、実際マックス・ビュシヨンは捜索を受け、ベルンに亡命する決心を固めた。一作家3点という出品規定に従い画家は4月1日開幕のサロンに《村のお嬢さんたち》(本展no.63参照)、《キューエノー氏の肖像》および《ルー川の風景》の3点を出品した。冒頭の大作が、当時内務大臣であったモルニー公(1811-1865)の所蔵である、とサロンの目録に明記されているのも意味深長で、ボナパルト派の懐柔策ともとれるが、それでもこの作品は、ことさらに醜さを目ざすものとして批判、諷刺の対象になった。3月《石割り人夫》《オルナンにおけるある埋葬の歴史画》をフランクフルトで展覧、成功を収める。

12月ルイ・ナポレオンが即位し、第二帝政成立。

1853年(34歳)

《水浴びする女たち》、《まどろむ糸紡ぎ女》(モンペリエ, ファーブル美術館)、《闘技者たち》(ブダ

ペスト美術館)



クールベ《アルフレッド・ブリュイアスの肖像》, 1853年, モンペリエ, ファーブル美術館



ペスト美術館)をサロンに出品。シャンフルーリはサロンの前から、スキャンダルを心配していたが、予想は見事に的中し、非難と嘲笑を巻き起こした。またクールベは、たまたま出会ったクーチュールと大舌戦を繰り広げるなどして、自ら好んで議論と諷刺の話題を提供する仕儀となった。

《水浴びする女たち》(モンペリエ, ファーブル美術館)を見たドラクロワは、何を意味しているのか不明瞭な主題を、野卑な肉塊という形にくるんで提出するところに、画家の役立たずな思想を見て吐き気を催したと、日記に記す。下見に現れたナポレオン三世は、その醜悪さに、思わず乗馬用鞭で一打くれたという。それと聞いたクールベは、そうと知っていれば、薄い画布を使っておいたのに、絵を破いた皇帝を訴えれば、たいした評判の裁判沙汰になったろうに、と笑ったむね伝えられる。

《水浴びする女たち》と《まどろむ糸紡ぎ女》ははじめ5点を、モンペリエの愛好家アルフレッド・ブリュイアス(1821-1877)が購入し、クールベに自分の肖像制作を所望する。彼はふた月前にドラクロワに自分の肖像を注文したばかりであった。クールベは6月に件の肖像を描き上げる。

1854年(35歳)

フランクフルトで展覧。モンペリエに画家を招待するというブリュイアスの提案に答えた手紙のなかで、クールベは、55年の万国博覧会に対抗すべく、「巨匠クールベの絵画とブリュイアスの蒐集品の展覧会」の企画を語る。5月から9月までブリュイアスの招きを受けモンペリエに過ごす。両者の交友を永遠に記念すべく《出会い(今日は、クールベさん)》(モンペリエ, ファーブル美術館)が制作される。画家はこのとき初めて地中海を見る。オルナンに帰郷する途中、リヨンを経てベルンに回り、亡命中のマックス・ビュシヨンに会う。オルナンでひどい黄痘に襲われ、ひと月以上外出できず、万国博覧会の準備の遅延に不平をかこちつつも、「想像可能な限りもっとも驚くべき」絵で、「わがアトリエの精神的・物質的歴史」であると称する《画家のアトリエ・現実的寓意》(オルセー美術館)に着手した旨、ブリュイアスに告げている。シャンフルーリ宛に長文でこの絵の「説明」を送ったのも、この年末ころか。

6月22日の政令で、本年のサロンは延期のうえ、翌年の万国博覧会と統合する旨、皇帝の名で通達されていた。年末(一説には53年末)「帝室美術館総長」ド・ニュヴェルケルク伯(1811-1892)より食事に招かれ、政府側の申し入れを受け入れ、「ぶどう酒を水で割る」なら1855年の万国博覧会で一室をあてがおうという提案を示される。だが激怒したクールベは、節操を売るなどはもつてのほか、自らの「知的自由」こそ大切であると答え、「大層な自信ですな」と冷やかす伯爵に切り返して、「自分が世界一傲慢な男であること

に今頃お気付きになるとは」とうそぶいた、云々という手紙をブリュイアスに送る。

1855年 (36歳)

《画家のアトリエ》制作が、万国博覧会の出品期日に間に合わず、特別猶予を風景画家フランソワ＝ルイ・フランセ(1814-1897)の仲介で取り付け、ようやく3月末パリに上る。出品リストに記した15点のうち11点は審査を通過したものの、肝心の《オルナンにおけるある埋葬の歴史画》と、《画家のアトリエ》とが拒絶されたため、ブリュイアスの資金援助を頼んで、個展開催を決意する。5月15日開幕の万国博覧会の美術館からほど近い、モンテーニュ街に設けたクールベの仮小屋は、6月28日に開場した。サロンには《石割り人夫》、《村のお嬢さんたち》、《出会い》、《糸紡ぎ女》、《麦をふるう女たち》(ナント美術館)などが出品される。個展には、「レアリズム—G.クールベ、その作品のうち40点のタブローを展覧」という掲示が出され、「ギユスターヴ・クールベ氏の40点のタブローと4点のデッサンの展覧と販売」と銘うたれた小冊子にも、「レアリズム」と題する序文が附された。「ただ伝統についての全き知識から、私自身の個性についての、理づめで独立不羈の感情を汲み取ろうとした。」「為す能うために知る、それが私の考えであった、[...]生きた芸術を作り出すこと、それが私の目的である」などの言葉が見える。入場料は当初の1フランから10スーに引き下げられたが、それでも入場者は少なく、この企画を正面から擁護した批評家も内輪の関係者たるシャンフルーリのみで、興行的には失敗に終わった。疲れ果てた画家はアントワープの招待を得て、夏の終わりにベルギーを旅し、ブリュッセル、アントワープ、ケルン、ストラスブール、ミュルーズを回った後、オルナンに戻り、年末、展覧会を閉じるためパリに上った。

クールベ《麦をふるう女たち》、1855年、ナント美術館



1856年 (37歳)

スイスのヌーシャテルで、マックス・ビュションが『レアリズム論文集』を発刊してクールベを擁護。また画家が3年も前から期待していた、テオフィル・シルヴェストル(1823-1876)の『現存の

画家たち』が公刊され、巨匠たちと並んでクールベに一章を割いたが、称賛よりも批判に傾く論調はクールベをたいへん失望させた。シャンフルーリは《オルナンの食休み》や《オルナンにおけるある埋葬の歴史画》の頃をなつかしみ、それ以来脱線気味のクールベを残念に思っていた。この年はサロンは開催されず、クールベはロンドンのクリスタル・パレスに作品を2点発送する。弁護士ローリエの招待で、2度目のベリエ地方滞在。8月末オルナンに戻る予定を伝えるが、9月にはベルギーで「巨匠たちの作品に接する素晴らしい機会」を得て、アントワープからの招きに応じている。ブリュッセル、オスタンデ経由で、リエージュ、ケルン、ライン河をマインツまで伝い、ストラスブール、ミュルーズ、ブザンソンとたどってオルナンに着着。

1857年 (38歳)

サロンの規約が大改定され、以降サロン開催は2年毎、作家一人当たり3点の制限は撤廃、審査委員会はアカデミー会員のみに構成され、無鑑査入選は、アカデミー会員および作品によって勲章を授かった者に限定されたため、サロンで入賞はしなかったがまだ叙勲されていないクールベは、1849年以来の無鑑査出品資格を失った。画家の憤慨したという話が今日伝わっていないところを見ると、入選目録にみえる6点がこの年の出品作のすべてで、選にもれたものはなかったとおぼしい。2点は狩猟を主題としており、批評家たちにも文句の付けられないジャンルであった。また物議をかます農民生活画をやめて、《セヌ河畔のお嬢さんたち(夏)》(本展no.14)といった屋外の都会風俗画に転進した。ブルードンはそこにパリ文明のもたらした墮落が表されているとみるであろうが、批評家たちは、品行のいかかわしさを疑わせる主題でもって観衆の注意をひこうとする、といった画家を非難した。こうしたスキヤンダルにもかかわらず、この作品は8年ぶりに再度の2等賞あつちとなった。

5月クールベやシャンフルーリは「植物学協会の資金で」「200-300人のパリの学生といっしょ」に、モンペリエに短期滞在し、ブリュイアスの世話になった。これに取材したシャンフルーリの短篇小说をめぐって、画家と著者との間にひと悶着あり、ブリュイアスとシャンフルーリとの関係にもひびが入る。ブリュッセルの展覧会に4点の作品を展示。

1858年 (39歳)

シャンフルーリがブリュッセル亡命中の出版業者エツツェル(1814-1886)宛書簡で、同地に長期逗留中のクールベの、ビール飲みすぎと遊びすぎを懸念する。9月フランクフルトに行き、早業を披露してはつきつぎと地元有力者の肖像をもし、狩猟に誘われては大手柄を上げ、誇張ある手紙にも得意満面の様子が伺える。また注

文を得、絶好の仕事場を提供され、《フランクフルトの婦人》(ケルン、ヴァルラフ＝リヒャルト美術館)、《狩猟の食事》(同)を制作する他、数点におよぶ大作の狩猟画に取り掛かる。二人のロシア人が画家を訪ね、アトリエの作品をそっくり買い上げる交渉を試みるが、失敗に終わったという。長く外国にとどまったのは、ひとつには、画家を白眼視する祖国フランスのアカデミーを中心とする画壇に対する、反発的逃避ないし消極的抵抗の意味もあったろうが、「私が外国を渡り歩くのは、私にとって必要な精神の自由を見いだすためだ」と手紙に書いてもいる。

クールベ《フランクフルトの婦人》、1858年、ケルン、ヴァルラフ＝リヒャルト美術館



1859年 (40歳)

1月ようやくオルナンに戻り、2月パリに上ったクールベは、サロン出品作の準備が間に合わず、計画を縮小したあげく、ついに出品を取りやめるが、その不在はかえって話題を撒いた。ザカリ・アストリュック(1835-1907)などは、クールベが公の場でいまだに無理解に曝されているのを遺憾とする意見を述べる。いっぽうクールベは、機会があれば、国の内外を問わず至るところに出品し、知己を広げる。ル・アーヴルでは海景画家ブーダン(1824-1898)に出会い、パリではホイスラー(1834-1903)と知り合った。文学者や芸術家たちの多く出入りする「ディヴァン・ル・ベルティエ」や、モンマルトルのマルティール街の有名なビアホールなどに入出入りする一方、パリの自分のアトリエでも会合を催した。「レアリズムの大宴会」と称した10月1日のそれは、なかなか荘厳なものだったらしく、「サツの犬」まで舞い込んだというこの会合をもって夏の最後としたクールベは、「この冬は来客無用」と宣言した。年末には、第二帝政の自由主義的政策転換に伴って、10年におよぶ亡命から帰国したビュションを祝う小宴が、その故郷のサラン(ジュラ県)でもたれた。

1860年 (41歳)

1857年以来美術批評に筆を取っていたジュール・カスタンヤリ(1830-1888)を知る。それまでのカスタンヤリは、クールベの稀なる資質に注目しつつも批判的で、自分自身の美学を理解できぬままに才能を浪費する工匠であるとか、芸

術とは思想を開陳するための伝導の場でも演壇でもないのに、ブルードンの思想の代弁者になっている、などと否定的な評価を下してきた。しかしアトリエを訪ねて以来、批評家はクールベの後半生最大の擁護者になってゆく。なかでもクールベの死後の名誉回復には決定的な働きを見せることとなるが、画家の妹ジュリエットの勧めで執筆したクールベ伝は、未完のまま、作者の死で中断されることとなる。

一方シャンフルーリも、クールベの画業を回顧する長大な論文を公表し、大画面(グランド・マシーン)に発揮される天才を顕揚し、鉄道に題材を取った、大公共装飾画に画家が着手することを勧め、またその画業をヴァーグナーの楽曲と比べて、未来の指針と認めた。

パリのマルティネ画廊、モンペリエ、ブザンソンなどで展覧するほかは、翌年のサロンを目指して、オルナンで制作に傾注する。シャンフルーリ宛の手紙によって、今後次々に発表されることとなる、鹿などを配した風景画の構想が、大向うの好評を博するような、文句のつけようもない「中立地帯」(風景画、動物画)の攻略を意図した戦術であったことが知られる。

1861年(42歳)

サロンは5月1日に開催。4年ぶりに復帰したクールベの出品作5点のうちには《春の発情期(雄鹿の闘い)》(オルセー美術館)、《水辺の雄鹿(騎馬猟)》の2大作があり、目論見どおりひろく絶賛された。なかでも前者については、これを国家買い上げのうえリユクサンブール美術館蔵とする計画が、ニュヴェルケルクおよびシュヌヴィエール(1820-1899)の同意の上で進行し、画家もおおいに乗り気であった。同じ頃、クールベが叙勲されるとの噂もひろまったが、発表されたリストにはクールベの名は見られなかった。また、問題の作品も、2等賞受賞者の作品であることが再度喚起されたのみで、フランシス・ヴェー(1812-1882)など友人の働きかけも空しく、特別の賞を獲得するには至らなかった。この結末で無冠の王となったクールベは、自分に対する仕打ちを道化芝居だと決めつけながらも、絵がリユクサンブール入りすることにだけは希望を託しつつけた。クールベを叙勲者から除外するのに直接手を下したともいわれる皇帝に対して、画家は後も、この「侮辱」を忘れない。メッスの産業博覧会で受賞、その他、リヨン、モンペリエ、ブリュッセルなど各地で展覧。《春の発情期》を展示したアントワープでは、「レアリスムの根底とは理想の拒絶であって」、「オルナンの埋葬」はその実ロマン主義の埋葬」だった。「レアリスムとは結局その本質において民主的芸術」である、などと演説をぶつ。年末には、カスタニヤリの肝煎りで、パリのノートル＝ダム・デ・シャン街にアトリエを開き、生きた雄牛をモデルにして衆目を驚かす。その折に公開した「弟子たちへの手紙」で、絵画を教育することは不可能

であり、各人は自分以外の師を持たない、等の主張を述べたが、この宣言もカスタニヤリの代筆かと推定される。

1862年(43歳)

カスタニヤリを代表に、弟子たちの出費で賃借りしていたパリのアトリエは、いたみ方が激しいというので、2月早々には家主から追い立てられ、閉鎖に追い込まれる。ファンタン＝ラトゥール(1836-1904)などは、暇つぶしの政治論議にうつつをぬかすアトリエの雰囲気になんまりしていたが、教授なしのアトリエという構想は評判を取った。カスタニヤリの紹介で、ウージェーヌ・ペルタン(1813-1884)、ギュスターヴ・シヨード(1817-1871)らの共和派政治家たちが、クールベに接近する。オルナンのための彫刻を一体鑄造。5月末カスタニヤリの紹介で、その故郷サント(大西洋岸地方)の豪農エチエンヌ・ボードリ(1830-1908)の邸宅に歓待され、翌年春まで、結局1年弱滞在する。ここでコロー(1796-1875)と共に風景画を制作する。

1863年(44歳)

サントでの祝宴や大規模な近作展の間を縫って「70-80点」と自称する数の制作に励む。なかでも中心となるのは、前年末から取り掛かった、サロンのための作品《法話の帰り道》である(今日紛失、本展no.64参照)。泥酔した司教を描いて宗教界の墮落を揶揄する冒瀆的なこの絵は、拒絶されることを見越して出品した、挑発のための作品とおぼしいが、サロンで拒否されたにとどまらず、同年、画家たちの広範な要求で開かれ、マネの《草上の昼食》によって歴史に残ることとなる「落選者展」からも拒絶された。シャンフルーリはこの絵の主題を道徳的逸脱と決めつけ、絵としても手抜きだ、と手厳しくクールベに諫言する。カスタニヤリ以外にほとんど弁護する者もないなかで、ブルードンが興味を示し、初めは小冊子のつもりで芸術論の執筆にとりかかる。結果は予定枚数の3倍に達する著述となり、65年、著者の死後『芸術の原理とその社会的使命について』として出版されることになる。

1864年(45歳)

1月のカスタニヤリ宛書簡によれば、現代の詩人たちは泉のまわりに配して、詩の現状を暗示する「まじめな批評」の作品(《ヒポクレネの泉》)を準備していたが、事故で破損し、放棄した、もう別の作品を準備する暇はないから風景画でまにあわず、云々とある。ところがサロンに画家が持ち込んだのは、《嫉妬をもってブシユクを追うヴィーナス》であった(今日焼失)。不道德との理由でこれが拒絶された、という報に接したクールベは、それは役人の偏見だ、それでは方々の美術館は総て閉鎖だ、と毒づく。昨年の復讐を目指した聖職者たちが、ウージェーヌ皇后を抱き込んで、美術行政職の役人たちに圧力を加

えようとする、虚々実々の裏取引があったとの噂も流れ、画家のアトリエでの展示を見た批評家たちの意見も、毀誉褒貶相半ばした。ブルードンはシヨードへの手紙で、こんな作品を人々が望んでいるなどとクールベが思ったなら、それは世を愚弄したというほかないが、自分としては《法話の帰り道》よりいっそうシツコクこの絵を擁護するつもりだ、と書いている。ブリュッセルで展覧されるや、この作品は一躍称賛的となった。

秋サランのビュションを訪ね、そのまま居座って、身なりも構わず風景や肖像の制作に没頭する。ヴィクトル・ユーゴー(1802-1885)の肖像を描く同意を取り付けるが、これはクールベのへまから実現しない。

1865年(46歳)

1月20日、ブルードン死去。「ブルードンという羅針盤を失い、人類も革命もその航路を失い、遠からず、兵士と野蛮の手にかかるだろう」とシヨードに手紙。すべてを放擲し、「36日」で《1853年のP.J.ブルードンの肖像》(本展no.30)を仕上げ、もう1点の風景とともにサロン出品締め切り2日前の3月18日に発送する。画家は自信満々だが、周囲の友人たちは気が気でない。サロンが蓋をあけてみると、反応は皮肉と憐憫との間を揺れ動き、友人たちにも不評であった。

6月19日ブルードンの遺著『芸術の原理とその社会的使命について』が発行されるや、両親宛の手紙に、この本に対する最大級の賛辞を綴る。妹ジュリエットが兄の結婚を画策した様子であるが、クールベは約束をすっばかして9月トルーヴィルに赴いたきり腰をあげない。「2000人のご婦人の訪問を受け」、40枚近い絵を制作した、といささか誇大妄想気味の手紙を父に送って、注文に追われる多忙な人気者の姿を描いてみせたのも、言い逃れの一策だったかも知れない。ホイスラーとその愛人ジョーに会って、彼女をモデルに数点描く。かつての愛人ヴィルジニー・ビネが死去する。

1866年(47歳)

両親にはトルーヴィルの社交界の寵児としての華々しい活躍ぶりを吹聴するが、ブリュエアスへの手紙では、もう千枚は絵を描いたというのに、まだ世間に認められぬ、と不平をこぼす。3月、進歩派の作家ジュール・ヴァレス(1832-1885)がクールベ論を発表。そこにも言及のある《女とおうむ》(ニューヨーク、メトロポリタン美術館)、《プレジール＝フォンテーヌの小川にある鹿の隠れ場》(オルセー美術館)の2点が、5月1日開催のサロンに出品された。美術総監ニュヴェルケルクの肝煎りもあってか、意外にも最良の場所に展示され、批評家たちもこぞって称賛した。褒賞及び叙勲まちがいなしとの下馬評だったが、またしても意外なことに、8月14日の伝達式にはクールベの名前は出ない。事の顛末に



クールベ《ブレイズル・フォンテーヌの小溪にある鹿の隠れ場》、1866年、パリ、オルセー美術館

ついでさまざまな噂が飛び交ったが、クールベの主張によれば、美術総監が今になって、《女とおむ》を1年前に買ったことを否認したのが紛糾の原因であり、レジオン・ドヌール勲章については、もとより独立不羈をもって人生の第一義とする自分が、叙勲前夜にもなつてから望んで事を荒立てる必要があつたろうか、と叙勲など意に介しない意地を見せた。

夏の終わりから、ショワズール伯の好意でドーヴィルに滞在。ブーゲン、モネ(1840-1926)も招かれる。トルコの有名な蒐集家カレル・ペイからも注文が来る。相変わらず各地に作品を展示するが、とりわけ《獲物分配の合図》(1856年、ボストン美術館)がボストンのクラブに買われ、展覧されたのに、画家は満足する。晩秋から冬をオルナンに過ごし、狩猟にいそむ傍ら、翌年の万国博覧会を目指して、夜おそくまで制作に打ち込む。

1867年(48歳)

「こんなに働いたことは生涯ない」とカスタンヤリに打ち明ける状態が4月末まで続く。5月1日パリに発つ。サロンには出品せず、4月1日開幕の万国博覧会にも4点の絵を出品するのみで、もっぱら、アルマ広場の仮小屋での個展に全力を傾注する。5月29日ようやく個展開幕にこぎつける。カタログには115点が記載され、さらに20点近くが追加される。「タブロー」としてまとめられた18点のうちいくつかには解説が付されるが、新作は《追いつめられた雄鹿》(ブザンソン美術館)のみ、「風景」18点も1点を除き旧作、それに対して「雪景色」7点の内5点は1867年の作、「海の景色」23点の内20点は1865年のトルーヴィル滞在中の作品との注記がある。「肖像」25点、「花の絵」4点、「習作・スケッチ」15点、「素描」3点、「彫刻」2点。重要作のうち、《オルナンの食休み》、《画家のアトリエ》、《麦をふるう女たち》、《水辺の雄鹿》、《法話の帰り道》などが抜けてはいたが、それでも空前の大規模な展示である。さらにブリュエアスの援助を得て、恒久のギャラリーを建造し、政府の諸展覧会に対抗しようという、誇大妄想気味の提案をするが、ブリュエアスの容れるところとはならず、11月には撤去

工事が始まる。

「世界中を驚愕させる」とのクールベの豪語にもかかわらず、個展は不入りで、たいして話題にもならない。戯画の材料を提供したのみで、興行としては半ば失敗に終わった。それでもクールベの名声は拡がり、ブリュッセルのオラン、有名な蒐集家ローラン・リシャールらの注文が入り、また愛好家ブールケの招きで、画家は8月をサントーバン・シュル・メール(ディエップ近在)に過ごす。

1868年(49歳)

《警戒している鹿》、《乞食の施し》(グラスゴー美術館)の2点をサロンに出品。後者は主題が陳腐で安直、絵としても醜悪、と酷評されるが、画家は意に介しない。9月、ル・アーヴルの展覧会にこの作品を含めて8点を出品するむね伝えるブリュエアス宛の手紙には、ついでオルナンに戻り、「真情のこもった社会主義的な」絵画を制作するつもりだとある。この年エチエンヌ・ボードリの社会諷刺『ブルジョワの陣営』に石版画の挿絵を施す。

秋、80歳で死去した新古典主義の画家フランソワ・ピコ(1786-1868)の後を襲うべくクールベがアカデミーに立候補したとの風評が立つ。噂を伝えるカスタンヤリの手紙に返事したクールベは、これを茶番と一蹴し、「既成の諸機関、諸アカデミー、専横的な政府は…進歩に対する直接の足枷だ」と気炎をあげる。

メジエール(ドゥー県)の医師オルディネール博士に招かれ、12月、鍛冶屋の助けを得て、一輪車を「発明」しようとする。

1869年(50歳)

サロンには、1867年すでに公開したことのある旧作《追いつめられた雄鹿》、そして《乾草の季節の午睡(ドゥー県の山地)》(パリ、プチ・パレ美術館)の2点を出品する。建築家イザベールの便りで、《追いつめられた雄鹿》が荣誉ある「方形の間」に展示されたと知らされる。この名誉にもかかわらず、批評家の評価は二分された。7月パ

クールベ《レンブラントの自画像の模写》、1869年、ブザンソン美術館



リに出て、ブリュッセルとミュンヘンに向けた絵の発送に従事する。夏エトルタに滞在し、この間、ベルギーのレオポルド二世から、博覧会参加に対して金賞を、またバイエルンのルートヴィヒ二世から聖ミヒャエル勲章を授かったと両親に書き送る。9月ミュンヘンを訪れ、歓待をうけ、早業のお手並みを披露し、朝までビール飲み比べをして優勝したりするかたわら、「5点の絵およびフランス・ハルス、ベラスケス、レンブラントを模写し、裸婦をひとつ、チロル風景をひとつ、スイスの秋山風景を6点」ものしたと両親に報告。

12月親友ビュシヨンの死をサランに看取る。

1870年(51歳)

ビュシヨンの死による落胆、肝臓障害も発現して、なかなか立ち直れない。2月、サロンの審査委員に全員一致で推挙されたと知られるが、結局は最終選挙で十分な票を取れなかったと分かる。サロンに出品したのは《雷雨の海》(オルセー美術館)、《雷雨の後のエトルタの断崖》(同)の2点で、どちらも前年の夏、サロンを目指して現地で制作したものである。4月29日、妹のジュリエットに「絵で52000フラン儲けた」と、成功を告げる。ディジョンのボルデの協力を得て、ストライキを闘うル・クルゾの女工たちを支援する展覧会を企画。4月27日にはソルボンヌで、画家レドンの師でもあった放浪の版画家ロドルフ・ブレダン(1822-1885)のための「文学と芸術の夕べ」を組織。5月、かつての巨匠たちの作品を蒐めた、さる絵画コレクションを一括購入するが、それはやがて無価値な複製ばかりであることが判明する。

クールベ《雷雨の海》、1869年、パリ、オルセー美術館



6月、クールベが叙勲に浴するとの報が流れ、22日には氏名が公表されるが、その翌日、画家は皇帝の命による荣誉を受けるのは自分の信条に反するとして、美術総監モーリス・リシャール宛に、辞退する旨の公開状を送り、話題をまく。国家が芸術に口出しするのは公衆の趣味を侵害するものとする彼の主張は、既に第二帝政の行きづまりが明らかだった当時にあつて、帝政反対派の仲間たちを喜ばせ、クールベの受勲拒否を祝う宴会が盛大に催される。こうしたクールベの自己宣伝と対照をなすのは、同じく受勲を拒否

しながら沈黙を守ったドーミエの場合である。7月、普仏戦争が勃発。スダンの敗戦による帝政崩壊後、共和国臨時政府下の9月6日、美術委員会の議長に選出されたクールベは、美術品保護の仕事にあたる。18日の速記録によれば、ヴァンドーム広場の円柱は好戦的で侵略を賛美する主題を表し、諸国民友愛の思想に反するものとして、これを分解し、造幣局に保管することを国防臨時政府に提案した。総会はプロシア進軍下の情況に鑑み、目下この提案を考慮に入れる余地はないと判断した。11月5日、国防政府あての手紙で、円柱を「壊す」のではなく、個々の浮き彫りを歴史博物館に展示するのだという趣旨を確認する。

1871年 (52歳)

2月、国会議員に立候補して落選。3月26日のパリ市会議員選挙で再び落選。クールベが議長として、美術館、美術展の再開と美術教育の再組織を検討してきた美術委員会は、芸術家連盟に改組され、47人からなるその運営委員会は、4月17日、クールベを議長に選出した。それに先立つ16日、形だけの予備選挙で6区の市議会議員に当選、美術代表に任命される。これによってクールベはコミューンに直接参加することとなる。一方、ヴァンドーム広場の円柱を「取り壊す」法令は、すでに4月12日に決議されていた。のちに軍法会議の前で画家は否定するものの、速記録によれば、クールベは27日に、この法令の執行を要請している。公安委員会の成立後、5月11日、コミューンの主流と意見の対立をみて、総会を辞任したといわれるが、そういう事実はない。5月16日の円柱引き倒しに立ち会った写真がある。5月21日ヴェルサイユ軍がパリに入り、市街戦が始まるが、クールベは芸術家連盟議長およびコミューン美術代表として、チュイルリー宮が炎上した5月24日までルーヴルにとどまり、執務を続ける。5月28日パリ制圧が完了し、クー

クールベ《サント=ペラジー監獄での自画像》、1872年頃、オルナン、クールベ美術館



ルベの死の噂はオルナンにも届く。6月3日心労も加わって母が死去。潜伏中のクールベは7日に発見、逮捕され、14日ヴェルサイユの軍法会議に出廷した。7月4日マザス監獄に収監。9月2日の判決により、七つの罪状のうち、結局、友人たちの弁護もあって、円柱破壊の罪のみを問われ、禁固6カ月、罰金500フランを言い渡される。画家は控訴せず、9月3日には、父宛に、おそらく恩赦を受けるだろうと書く。9月22日サント=ペラジー監獄に移送。11月2日にはパレットを与えられ、絵を描き始める。12月30日容態悪化のため、ヌイイのデュヴァル博士の療養所に移される。

1872年 (53歳)

1月末、痔の手術を受ける。3月2日入院のまま刑期満了。同月デュラン=リュエル画廊で絵の売り立て。4月には恒久展示会をパリで企画しようとするが、警察の許可が下りず中止。サロンには1869年にミュンヘンで制作した《裸婦》のほか静物を1点発送するが、メソニー(1815-1891)を中心とする審査委員の圧倒的な敵対にさらされて落選する。5月オルナンに戻る。パリでは、ソーモン通りやヴィユー・コロンビエ街の、戦争中留守にした住居の財産や利権をめぐる訴訟が持ち上がり、妹ゾエが取り仕切る。オルナンの家もプロシア軍の略奪にあっていた。ディエップに居た息子デジレが7月6日に亡くなる。

1873年 (54歳)

冬の間じゅう体調芳しくなく、リューマチや肝臓肥大に悩まされ、制作ははかどらない。1月、ウィーンの万国博覧会に出品する意向を示すが、公式の参加にすると、絵がフランス官憲の手で差し押さえられる恐れがあった。クールベの自由には行かぬ情況を見てとったカスタニャリは、ウィーンのどこかのクラブに出品する名目で、この際に可能な限りの作品を国外に持ち出すようすすめる。

ティエール(1797-1877)が権力の座を失い、王制復古の試みが挫折して元帥マクマオン(1808-1898)が大統領に就任するや、クールベの身辺はにわかにあわただしくなる。5月30日ボナパルト派が大半を占める国会でヴァンドームの円柱再建案が採択されたため、6月にはセーヌ県知事の請願により、また7月にはドゥー県知事の請願により、賠償金の名目でクールベの財産差し押さえが執行された。クールベはすでに家族や友人を頼って作品の隠匿に取りかかっていたが、ここに及んで身柄を拘束される危険を感じ、スイスに亡命する決心を固める。7月22日オルナンを後にした画家は、ラ・トゥール=ド=ペルズに落ち着いて、医師オルディネールに再会するが、財産の問題で妹ゾエと対立関係にあることを知らされる。土地の白ワインに溺れる生活となるが、それでも訪ねてきた父の肖像を2回のポーズで仕上げる力量を見せたという。

1874年 (55歳)

酒びたりの生活のなか、クールベの偽作が出回り、クールベとパスカル・ピアは、ジュネーヴのピアの画廊と、同地の贋作屋とは無関係であるむね『フランス共和国』紙に弁明文を寄せる。パリではあいかわらず、カスタニャリがクールベの利益の弁護に努める。6月24日付け『タイムズ』紙上で、英国亡命中のフェリックス・ピア(1810-1889)が円柱取り壊し決議の責任表明をしたにもかかわらず、6月26日セーヌ県民事裁判所は、円柱「取り壊しの原因」たるクールベに、「権力の濫用」を認め、「国家の定める」再建必要額全額を払うよう判決を下す。憤慨した画家は控訴する。シルヴェストルによれば、このころのクールベは飲みすぎで、病的肥満、頭脳にも損傷をきたし始めていたという。フランスの警察の監視はスイスに及び、9月25日の報告には、パリ・コミューンに賛意を表して流刑に処されていたニュー・カレドニアから脱走して、スイスに亡命したばかりの政治家アンリ・ロシュフォール(1831-1913)の肖像をクールベが描いたことが記録されている。

1875年 (56歳)

2月スイス共和国の寓意彫刻を鋳造し、3月ラ・トゥール=ド=ペルズの典司から感謝状を受ける。5月29日、妹ゼリーの死を知り、「人に仕え人を喜ばすことしか人生に喜びとてなかった」妹への哀悼の手紙をジュリエットに送る。8月15日より自作を含め総計150点におよぶ「古今の巨匠」の展覧会をボン・ポールの居所で開く。ボードリラの努力も空しく、8月6日控訴院は74年の判決を追認し、11月19日の代訴人からの手紙には、賠償金額が40万から50万フランに達するだろうとある。

1876年 (57歳)

3月、カスタニャリの反対にもかかわらず、画家は不正義の償いを求める手紙を千部以上印刷させ、ユゴー、ラスパイユ(1794-1878)、グレヴィー(1807-1891)らの有力共和主義者に発送する。カスタニャリたちによれば、パリは無理でも、フランスに住むのは可能だろう、うんぬんという手紙を12月24日父とジュリエットへ発送。

1877年 (58歳)

父からフランスに戻るよう説得されるが、1月7日、危険が多すぎる、と答える。友たちとフランス側に国境を越える侵入をやった翌日、フランス憲兵隊がスイス側に出頭してクールベ拘禁命令書を示すという事態が発生したばかりであった。5月24日最終判決が下り、賠償額は32万3091フラン68サンティーム、毎年千フランずつ分納を宣告される。カスタニャリの助言で、帰国は見合わせるが、翌年のパリ万国博覧会への参加は、問題なく認められた様子である。

10月8日、水腫悪化のため、ショー＝ド＝フォンの病院に入院。11月26日、パリのオテル・ドルオーでクールベの作品と財産が競売にかけられる。翌年1月1日に賠償額の第1回目を払うつもりであった画家には、もとより不本意な売り立てで、出来高も僅か1万フランであった。安く買い叩かれたと聞いた画家の心痛は大きかった。12月31日6時半にラ・トゥール＝ド＝ペルスにて死去。享年58歳。

1878年

1月3日ラ・トゥール＝ド＝ペルスの墓地に埋葬。万国博覧会に何点が展示されたのとならんで、デュラン＝リュエル画廊で、30点にのぼる作品が展示される。

1880年

79年共和国大統領となった、同郷人ジュール・グレヴィーの下で、コミューンの特赦が実現する。

1881年

家族の寄贈により、《オルナンにおけるある埋葬の歴史画》がルーヴルに入る。国家とパリ市が年間購入額のほとんど全額に相当する15万フランで5点の作品をブチ＝パレ美術館のために購入。

1882年

パリの美術学校で回顧展。カスタニャリがカタログを執筆。

1883年

カスタニャリ『ギュスターヴ・クールベとヴァンドームの円柱、亡き友のための弁明』を公開。

1906年

ジョルジュ・リアの労作『画家ギュスターヴ・クールベ』が、著者の死後に刊行される。

1911-12年

カスタニャリの遺稿の一部が「クールベについての本の断片」として、『ガゼット・デ・ボザール』誌に掲載される。

1919年

第一次世界大戦のためか、生誕百年は、フランスの公式国家行事としては祝われない。ニューヨークのメトロポリタン美術館が大回顧展を開催。パリのベルネーム・ジュヌ画廊で回顧展。あわせてテオドール・デュレ著『クールベ』が刊行される。遺体がオルナンに移される。

(いながし げみ・東京大学助手)

(本稿はパリで1977年に開催された『クールベ』展覧会カタログ所載マリ＝テレーズ・ド・フォルジュによる略伝に負うところが多い。)

Crédits photographiques:

Cliché des Musées Nationaux, Paris: cat.n°13,
42, 52; figs. 9, 11

Kunstmuseum Bâle, Colorphoto Hans Hinz:
cat.n°21

Lauros-Giraudon: cat.n°18

Musée Courbet, Ornans, Photo Gigandet:
cat.n°62

Nasjonalgalleriet, Oslo, Photo: J. Lathion:
cat.n°3, 8

Philadelphia Museum of Art, Philadelphie,
Photo: Eric E. Mitchell: cat.n°43

Ville de Paris, Musée du Petit Palais, Photo
Bulloz: cat.n°4, 14, 30, 37; fig.10

ainsi que les prêteurs

ギョスターヴ・クールベ展カタログ

監修 阿部良雄
編集 石橋財団ブリヂストン美術館学芸部

デザイン 浅井 潔
制作 アイメックス

発行 日本放送協会(NHK)

Catalogue de l'exposition *Gustave Courbet*

édité sous la direction de Yoshio Abe,
professeur à l'Université de Tokyo
par le Bridgestone Museum of Art, Ishibashi Foundation
réalisé par Kiyoshi Asai et IMEX Inc.
pour la Japan Broadcasting Corporation (NHK)

©NHK 1989